

合同詩集『抒情詩』の詩の形式と構成

— 『若菜集』の位置づけの為に —

橋 口 晋 作

明治三十年四月に刊行された宮崎八百吉編『抒情詩』は、国木田独歩「独歩吟」、松岡国男「野辺のゆき」、田山花袋「わが影」、太田玉茗「花ふゞき」、嵯峨の山人「いつ真で草」、宮崎湖処子「水のおとづれ」から成る合同詩集である。「独歩吟」を始めとする各詩集は、序と詩篇から成っている。序は、調子を軸に作者の詩についての考えを記したものである。詩の数は、「いつ真で草」が極端に少なく九篇、最も多いのが「わが影」の四十一篇であるが、他の四詩集は二十一篇から三十篇と近い詩数になっている。また、詩集には、自由詩を試みたもの、字下げに様々な工夫をしたもの、句読点が施されたものなどがある。島崎藤村が第一詩集『若菜集』をまとめることになった契機は、この六人の合同詩集『抒情詩』の刊行にあったと考える。¹⁾同年八月に刊行される『若菜集』が質・量共に『抒情詩』を凌駕するものであったのは確かだが、『若菜集』が『抒情詩』の世界全てを備えていた訳ではない。このようなことから、本稿において筆者は、『抒情詩』の六人の詩人の詩の世界を、その形式と構成を連を単位として考察して行くこと²⁾によって捉えて見たい。この考察によって、藤村の同時代の詩人達の詩の世界が明らかになり、藤村の詩の特徴もまた明らかになるのではないかと考える。

国木田独歩 「独歩吟」

独歩の「独歩吟」の詩は、二十一篇である。

この詩集を連の数からみると、一連から成る詩が九篇、二連から成る詩が七篇と、三連に達しない詩が七割以上を占める。この割合は、『若菜集』期間の二十九年九月の最初の詩群「草影虫語」の全てに次ぎ、『若菜集』以前の二十八年七月の「ことしの夏」詩群の三分二に勝る比率である。なお、「独歩吟」には、後記のように一連の行数の変化する詩はない。

一連から成る詩の行数をみると、四行が七篇、五行と六行が一篇ずつと、四行の詩が八割弱を占める。詩の調子は、七五調の詩は僅かに二篇に止まり、藤村詩には見られない最初の行を七七とする詩が五篇もある。また、「独座」という四行の詩は、意識的に漢文訓読体が試みられ、藤村詩にない自由詩となっている。偶数行が二字下げとなっている詩が三篇あるが、藤村の最初の詩「蟬」(二十七年七月)も偶数行は二字下げで、この形は藤村詩でもよく出てくる。

二連から成る詩の一連の行数は、四行が三篇、三行が二篇、六行と八行が一篇ずつと、一連から成る詩の行数よりも幅が広く、多様である。詩の調子は、七五調の詩が四篇と半数以上を占め、七六、七五、七六や七五、七五、七七五、七五、七七、七五という調子³⁾もある。残りの一篇は、最初の連の一・二行と二連目の最終行が五七五、この間の五行が二字下げで七五となっている。二連から成る詩では、偶数行が二字下げとなっている詩が四篇と、一連から成る詩よりも比率が高くなっている。

三連から成る詩が、一連四行の詩「門辺の児供」・「今こそは」と一連五行の詩「山の声」の三篇ある。

「門辺の児供」は、七五調で、偶数行が二字下げになっている。この詩は、子供らを見る毎に可哀想にとその将来を思いやった心内語が第二連から第三連の始めにかけて記されていて、全体が一文という体裁

になって(第一連が第三連にまたがって)いる。「今こそは」は、字下げなしの自由詩である。なお、各連の最終行が五七五「今こそは此身ひとつの○○○なれ」の繰り返しとなっている。この詩は、第一連と残りの二連の二部構成である。第一連は船出の決意、第二連は海への呼びかけ、第三連は故郷への別れの言葉となっている。「山の声」は、七五調、偶数行が二字下げの詩である。この詩も二部構成で、第一連は風や水の音の様子、第二、三連は山人の妻の許から帰る歌声の様子を時間を追って描いている。

四連から成る「森に入る」・「故郷の翁に与ふ」・「山林に自由存す」三篇は、全て一連四行の詩である。

「森に入る」と「故郷の翁に与ふ」の二篇は、共に七五調で、偶数行が二字下げになっている。「森に入る」は、第一連が自由に憧れて森に入っていたこと、第二連が乙女に誘われてその森から出たこと、第三連が好みが変わらず都育ちの乙女に去られたこと、第四連が恋に傷心して再び森に帰ったことと、時間を追った展開になっている。「故郷の翁に与ふ」は、二連ずつの二部構成である。第一、二連は故郷の翁が昔と変わらぬ生活をしていることを思い遣ったところである。第三、四連は、年月が経って「われ」が「昔のわらべ」ではなくなったことを記し、翁とのずれを噛みしめている。「山林に自由存す」は、序によれば「歌はざるを得ざる情熱に駆られて歌」った自由詩だったようで、字下げは無い。この詩は起承転結という展開で、第一連のどうして山林を見捨てたのかという思いから、第二連の十年が経って「自由の里」から隔たってしまったという思いに続き、そこから第三連の天外を望むと遠方の峰が目に入るということに展開し、故郷はどこを探している間に雲の下に隠れてしまうという第四連で結ばれている。詩想は、「森に入る」に通じる。

序で独歩は「詩体につきましては余は甚だ自由なる説を有す」と述べて

いた。その通りに自由詩があり、七五調以外の変わった調子があり、七五調も破調が相当に認められた。七五調の詩は、全て偶数行が二字下げられていたが、これも「平板調」を嫌って、意識的に視覚上の変化を付けたものと考えられる。一連の行数は、四行のものが七割以上を占めている。藤村詩でも二十九年十月の「一葉舟」詩群以後この形が大勢を占めるようになっていた。

劍持武彦氏によれば、「独歩吟」は佐々城信子との恋愛の最高潮の時期からその破婚の頃までに作られた詩から成っているとのことである。作品としては、特にその破婚の頃の考えを盛った詩、「山林に自由存す」などが特徴をなしていると見られる。

松岡国男 「野辺のゆき、」

国男の「野辺のゆき、」の詩は、三十篇である。なお、「野辺のゆき、」の中には七篇の〇印の(題のない)詩がある。

この「野辺のゆき、」の詩を連の数からみると、一連から成る詩が十篇、二連から成る詩が九篇と、三連に達しない詩が三分の二弱を占めている。この割合は、前節の「独歩吟」よりは低く、藤村の「ことしの夏」詩群のそれに等しい。二連以上の詩には、後記のように行数の変化する詩がある。行数の変化する詩は、「独歩吟」にはなく、藤村詩では二十九年十二月の「うすごほり」詩群から現れていた。詩の調子は、「我妹子」に贈った蘭を詠じた、一連から成る〇印の詩一篇を除いて、他は全て七五調である。その〇印の詩の調子は、五七調となっていて、最後に七音が付けられている。この最後の七音は、四字下げとなっていて、ここだけが「野辺のゆき、」の中で唯一字下げになっているところである。また、詩には全て読点が施されている。読点が置かれているところは、文末、呼びかけたところ、倒置したところ

ろ、限定などを加えた連用修飾節、省略のあるところなどであるが、後の二者などは、それほど厳密には置かれていない。

一連から成る詩の行数は、四行が四篇、五行が二篇、六行・七行・九行・十一行がそれぞれ一篇ずつとなっている。「独歩吟」ではもつとも行数の多かった六行以上の行数の詩が、「野辺のゆき、」では四行の詩と同数となっている。

二連から成る詩の行数は、三行が一篇、四行が六篇、四行二行、八行六行と行数の変化するものが二篇となっている。

三連から成る詩は、一連四行の詩「人に別るとて」・「鶯がうたひし（夢がたり）」と慰めるもののないことを詠じた〇印の詩、同じく「わが恋やむは何時（いつ）ならん（む）」で始まる〇印の一連六行の詩、それに行数の変化する「暁やみ」・「小百合の花」の六篇である。

「人に別るとて」は二部構成で、今日忘れ貝を拾ったのではないかという不安と物思いが第一連から第三連の前半にかけて記されて行く。

第三連の後半は、このような「我」に対して安らかな眠りについていく「君」を写し出して終わっている。「鶯がうたひし（夢がたり）」は、

第一連は鶯が雲に故郷の谷の清水に言伝して欲しいという言葉、第二連は昔、清水は自分に何といったのかという鶯の言伝の問いそのもの、第三連はこれらを総合したものとなっている。一連四行の〇印の詩は二部構成である。第一、二連は、今「我」を尋ねて心を慰めてくれるものが何もないということ述べている。第三連は、衣の袖を映し出して、それが塵と涙で汚れてしまったと記して終わっている。この詩の「我」の今の情況は「鶯がうたひし（夢がたり）」の鶯の現状に近そうだ。一連六行の〇印の詩は、第一連と第二連の残り五行が「〇〇〇：て〇〇〇：む（ん）時」と同型で、かつ対照的な内容になっている。第三連は第二連を受けたものとなっているので、この詩は、第一連の恋いの成就の場合と、第二、三連の失恋の場合の二部構成である。

珍しく藤村詩に多い三角関係のようなものが匂わされている。「暁やみ」は、第一連が七行、第二連と第三連が九行となっている。ところが、内容上は起承転の展開である。第一連は、暁闇が「恋のかばね」を包んでいると言っている。第二連は、人知れず「我」が「君」の家の垣根の外で泣いていると訴えている。第三連は、「一転して、「君」の夢に入って、会いたいという願いを記して終わる。「小百合の花」は、「暁やみ」よりも一行ずつ多く、八行、十行、十行となっている。第一連は、小百合の花が夢に現れて、「我」に会えなくて枯れそうだと語ったと告げている。第二連は、その小百合の花に「我」と同様に乙女も泣いていたのかと尋ねるが、確かな返事は得られない。第三連は、恋に破れた時、花の側に来て死ぬので、花に「清きまことの夢」を永遠に見せてくれないかと頼んで終わる。こちらは、序破急の展開と見てよからう。

四連から成る詩は、「月の夜」、「野の家」の二篇で、共に一連四行の詩である。

「月の夜」は序破急の展開で、秋の月の夜を描く第一連から始まる。第二連は、「君」が小琴を弾き、「我」が笛を吹いた時の思い出である。第三、四連は、「我」が山賤だったらという仮定をしたものである。第三連の後半は山賤で「君」に恋いをしたら、第四連は今の「我」のように「君」の家の外で泣いている身であったらと具体的に思いを進めて終わる。「野の家」は二連ずつの二部構成である。第一、二連は、故郷の袖子の家の上の星を思い出しているところである。第三、四連は、今都会に移住してその星を見ているところである。なお、第三連の後半は第四連の前半にまたがっている。

五連から成る詩は、一連四行の「美しき姫に若者がいひし」の一篇だけである。この詩は四部構成で、先ず第一連の、一目見ただけで姫が「よそならず思」われるという若者の言葉で始まる。次ぎの第二、

三連は、二人の関係は姫が若者を「むかしの人」に似ているという通りなのかもしれないという若者の思いである。第三部の第四連は、一転して、若者を「むかしの人」に似ているというのなら、姫も若者を愛しく思っているのだろうという若者の言葉である。最後の第五連は、姫にどうして沈んでいるのかと問う一方で、若者の胸の高まりを伝えて終わる。前世といったものを背景に使いながら、第四部に向かつて情欲を高めてい、藤村詩の世界に通じる。

六連から成る詩は、一連四行の詩「花陰の歌」と、第一連の三行から第五連の七行まで連毎に一行ずつ増えていって、最後の第六連で四行に戻る「都の塵」の二篇である。この二篇は、藤村の長詩「懐古」などと同じように二連が一组になって展開して行っていると認められる。二篇共に三部構成である。

「花陰の歌」の第一、二連は、馬に乗っていた「我」が「君」に氣付いて、歩いて帰ろうと言いつつ出るところである。第三、四連は、乙女が安心して歩けると言うので、「我」が幸福感に浸されるところである。第五、六連は、この記念すべき夜もやがて尽きようとするところで終わる。「都の塵」は、都に立つ塵をいぶせく思っていたという第一、二連で始まる。第三、四連は、一転して、「君」が都が良いと言うなら、「我」は考えを改めようというところである。第五、六連は、しかし、「君」が山辺が良いと言えば「我」は嬉しいのだがと言いつつ終わっている。これは、序破急の展開である。

「野辺のゆき、」は、早く蒲原有明が「夢と恋はその主題」と述べていたが、夢の詩に始まり、恋の詩で終わっている。夢の詩は、故郷、少年時代、亡くなった故郷の恋人に関わっている。その故郷や少年時代を懐かしく思う情には、「独歩吟」に通じるものがある。恋の世界は、心で訴え続けているという風で、哀切である。調子は、「独歩吟」と対照的に一篇を除いて、七五調で整えられていた。読点

を句点に変えて用いたり、行中に置いたりしたのは、やはり平板になるのを避けようとしたのであろうか。矢野峰人氏は、『抒情詩』詩人の中で「特に傑出せる作家」としている。なお、繰り返しの言葉の表記が変えられているが、これは、次の田山花袋の詩にも見られる。

田山花袋 「わが影」

花袋の「わが影」の詩は、四十一篇である。

この「わが影」の詩を連の数からみると、一連から成る詩が十三篇、二連から成る詩が八篇と、三連に達しない詩は半数に止まっている。これは、「独歩吟」、「野辺のゆき、」よりも相当に少ない率であり、藤村では二十九年十月の「一葉舟」詩群に始まる連数の多い詩群に近い。「わが影」の詩には一連の行数の変化する詩はなく、字下げも見られない。序で花袋は、「我は始めより断乎たる主張を以て、七五七調を取る」と述べているが、十五行一連の「林の奥」と二十一行一連の「同(なき人をおもふ)」の二篇を除いて他は全て七五調である。「林の奥」は独歩の「山林に自由存す」と同じく自由詩であり、「同(なき人をおもふ)」は八七調である。これらは、「詩想より促されたる」調べということなのであろう。いずれも一連から成る詩であるのが興味深い。

一連から成る詩の行数をみると、四行が三篇、五行が二篇、六行が四篇、八行・九行・十五行・二十一行が一篇ずつとなっている。六行の詩が最も多く、十行以上の詩が二篇もあるなど、「野辺のゆき、」よりも一段と長い詩が多くなっている。

二連から成る詩の行数は、四行が五篇、三行・五行・六行が一篇ずつとなっている。四行が多くなっている点は、「野辺のゆき、」と傾向を一にしている。

三連から成る詩は、一連三行の詩「ある夜」、一連四行の詩「まごゝろ」・「わが心」・「松原」・「わが住む里」・「昔の友」と一連五行の詩「旅にありける夜」の七篇である。

「ある夜」・「まごゝろ」・「わが心」・「松原」・「旅にありける夜」の五篇は二部構成になっている。「ある夜」は、第一連が問いかけ、第二、三連はその問いに対する二つの答えである。「まごゝろ」は、第一、二連で対照的な自分の心を描き、第三連は二つの心に戸惑う自分を描き出している。「わが心」は、第一、二連で「我」が心を解説するが、第一行が「おのがこゝろ（心）は○○○○」の、第四行が「○○○○のごとくと○○○○」の繰り返しとなっている。第三連は「君」の態度への心の恐れが記されている。「松原」は、第一、二連の最後が「…をしも 見たるがごと（如）しかすかにも」の繰り返しとなっている。「君」の幻影を語る。第三連は「君」がいる筈もないのに松原を尋ねるということである。「旅にありける夜」の第一、二連は、旅の宿で「君」に会ったのは夢かと怪しんだということである。第三連は、「なつかしき菊の花」がその部屋に生けてあったということである。一種の種明かしである。「わが住む里」・「昔の友」の二篇は、三部構成になっている。「わが住む里」は、第一連が里の山陰にのどかな場所があることを述べ、第二連は「あやしき心になるとき」はその山陰に行ったと語り、第三連では「君」を思って耐え難くなったので、その山陰に行こうという展開になっている。「昔の友」は、第一連が思いがけず竹馬の友に会ったこと、第二連がその友に今何になっているかと尋ねられて、何も答えられなかったこと、第三連は今悲しみと憂いに沈んでいるという、その訳が記されている。

四連から成る「君をこひしは」・「雨の夜」・「君が名」・「雲のみだれ」・「なき人をおもふ」五篇は全て一連四行の詩である。「独歩吟」でも「野辺のゆき、」でも四連から成る詩は全て一連四行であった。

「君をこひしは」は二部構成で、各連の第一行が「君をこひしはいつならん」で始まる。各連は、それぞれにその時を述べて行くのだが、前二連が単に「君」の行動を記すのに対して、後二連は自分が中心になっている。「雨の夜」は、三部構成である。第一連は、「君」はいま何をしているだろうかという問いを提示したところである。第二、三連は弹琴、作歌、読書と「君」の行動を思いやったところである。第四連は、一転して、「おのれのごとく君もまた ものを思ひ」ているだろうと想像している。起承転という展開である。「君が名」は、第一連が野辺で「君」が名を叫んだこと、第二連がその声が遠くに響いて行ったこと、第三連がその声が次第に消えて行くこと、第四連は声が完全に消えて、孤立感が残ったことを記している。この詩は、時間を追った展開になっているといえよう。「雲のみだれ」は、三部構成である。第一、二連は、入道雲の姿を「或は」・「或は」と例えて描いて行く。第三連は、そのような雲も風が吹けば忽ち消えてしまうと言っている。第四連は、一転して、風に自分の胸の乱れを吹き払うように願っている。この詩は、序破急の展開である。「なき人をおもふ」は二部構成である。第一連は、亡い「君」に今どこにいるかと問いかけている。第二連からの三連は、その「君」のいる場所を次々と考えて行ったところである。

五連から成る詩は、一連四行の詩「君が姿」・「あら磯」と一連九行の詩「眺望」の三篇である。

「君が姿」は、起承転結の展開になっている。第一、二連は、「君」が「かへりみだにも」しなかったということが記される。第三連は、「君」は何を考えて歩いて行くのかと問うている。第四連は、転じて、「君」を恋う「我」に気づかぬのかと言っている。第五連は、一目でも「我」を「かへりみ」して欲しいという願いを記して終わっている。「あら磯」は、二部構成の詩である。第一連から第四連まで

は、この間の「我」の行動が記されている。第五連は、この間、「我」は「君」を思う外に何を考えていたかと、顧みている。「眺望」は、また起承転結の展開である。第一、二連は、山の上から「君」の家、「君」の部屋と探し、見ているところである。第三連は、しかし、「君」は「我」のことなど知らないだろうと述べている。第四連は、苦しい「我」の心と対照的に辺りは華やいでいるということが記される。第五連は、ふと「君」の家から傘が出て行くのが目に入るという展開である。

五連以上から成る詩として、六連、九連、十連、十一連、二十一連から成る詩がある。いずれも一連四行の詩一篇ずつである。

六連から成る詩は、「月の夜」である。この詩は、二連ずつの三部構成である。第一、二連は、月を愛で、波の調べに乗りながら歌って出て言った「君」の胸には、美神が宿っているに違いないと言っている。第三、四連では、絶えたり続いたりして遠ざかって行く声に、「君」の乱れ狂う心を想像している。第五、六連では、遂に聞こえなくなった声に、悲しき思いを思いやっている。時間を追ったように見えながら、並列的な世界になっているのが特異である。

九連の詩「朧月夜」は、三部構成となっている。第一連から第四連までの四連は、朧月夜に嫁入りの車が通り過ぎたことを記している。第五連から第七連までの三連は、もの悲しくなった「我」が月と花との奥に分け入るところである。第八、九連は、ある木の本で嫁君が泣きながら嫁入ったのではないかと思つたというのである。起承転という展開で、何か意味ありげな詩である。

十連の詩「夕月夜」は、四部構成である。第一、二連は、「君」に会いたくて、いそぐなところを歩いたことが記されている。第三連から第五連までの三連は、しかし、「君」の姿をどこにも見つけることが出来なかつたことが記されている。第六連から第九連までの四連は、

夕暮れ、偶然「君」と出会つたことが記される。最後の第十連は、月に「君」を照らすように呼びかける言葉である。この詩は時間を追つた物語詩であるが、藤村の三十年八月の長詩「四つの袖」はもつと長い時間を追つた物語詩であつた。

十一連の詩「ともし火」も、四部構成の詩である。第一、二連は、灯火が昔からの「我」の友であることを記す。第三連から第五連までの三連は、思いのままにならない上に、恋にも苦しめられたことが述べられている。第六連から第九連までの四連は、その恋人が「あらずな」つて、「我」が深く傷ついたことが記されている。最後の二連は、侘び人となつた「我」を灯火がてらすことを記して、この詩は終わっている。第四部は、第一部に帰るといふ風である。

二十一連の詩「野遊」は、六部構成である。第一連から第三連までの三連では、「君」を野遊びに誘いえて、「我」は今日こそ恋いを告白しようと思つていることが告げられる。第四連から第七連までの四連は、恋いを語ろうと思つている「我」に対して、「君」は無心であることが語られている。第八連から第十二連までの五連は、橋のたもとで告白しようとしたが、花に見入っている「君」に躊躇ってしまったということである。第十三連から第十五連までの三連は、その後、何回も言おうとしたことはあつたが出来なかつたということが語られる。第十六連から第十九連までの四連は、野原が尽き、もうこれが最後の機会という時も告白出来なかつたことが語られている。残りの二連は、遂に恋いを語ることもなく別れたことを語つて終わっている。この詩は、「夕月夜」と同じ時間を追つた物語詩である。

劍持氏は「わが影」を「ダンテ『新生』のイメージに通う」恋のなりゆきを綴つた連作と考察している。序で花袋は、「わが国の女性と、恋愛とは、いかに烈しき血と、いかに優美なる趣とを備へたるか」と述べているが、その詠じた世界は男性の片恋の心情である。短い詩は

意識的に構成されているが、連数の多い詩は、変化に乏しく、時間を追って成り行きを描いただけという外ないものが目に付く。

太田玉茗 「花ふゞき」

玉茗の「花ふゞき」は、「野辺のゆき、」と同じ三十篇の詩から成っている。

この「花ふゞき」の詩を連の数からみると、一連から成る詩が六篇、二連から成る詩が八篇と、三連に達しない詩は半数弱に止まる。これは、「わが影」よりも更に低い率である。二連以上の詩には、「野辺のゆき、」の詩と同じく行数の変化する詩がある。序で例として七七、七七、七七、五五の調子を肯定的に挙げては、詩の調子は、全て七五調である。また、後記のように全ての詩に字下げがあり、句読点が施されている。字下げは、変化に富み、印象的である。句点は、原則として文末に置かれるようであるが、連中の文末に置かれたところもある。読点は、連中の文末や偶数行の行末に置かれるようであるが、例外も相当にある。「野辺のゆき、」のように行中に読点が置かれることはなく、形式的に整えられた印象がある。

一連から成る詩の行数は、八行が二篇ある外は、六行、十行、十二行、十六行が各一篇ずつとばらばらであり、行数も多い。六行の詩は、二、四行が二字下げ、三、六行が四字下げとなっている。『若菜集』には、これと同じ字下げはない。¹⁰ 残りの八行、十行、十二行、十六行の詩は、全て偶数行が四字下げとなっている。藤村詩で偶数行の四字下げが見られるのは、二十九年十一月の「秋の夢」詩群の「母を葬るの歌」（七音五音交互の音数だが）からである。

二連から成る詩の行数は、三行が一篇、四行が二篇、六行が四篇、四行六行と行数の変化する詩が一篇となっている。六行が半数を占め

るということは、前出の三詩集にはなかった。三行の詩は、二行目が二字下げ、三行目が四字下げとなっている。四行の詩は、偶数行が四字下げである。六行の詩は、二篇が二、四行が二字下げ、三、六行が四字下げ、一篇が偶数行の四字下げ、残りの一篇は、一連目は偶数行の四字下げ、二連目は、二、四行が二字下げ、三、六行が四字下げと三種類になっている。行数の変化する詩は、偶数行の四字下げである。三連以上から成る詩は、全て偶数行が四字下げとなっている。三連の詩は、一連四行の詩「我星」・「朧月夜」と一連八行の詩「坊や」の三篇である。

「我星」は、第一連がある星を見つけたこと、第二連は誰もその星の名を知らなかったこと、第三連はその星を我が星と呼ぶことにしたこと、と前の連を踏まえながら展開している。「朧月夜」は、第一連と第三連が「覚めよ恋人」という呼びかけで始まる二行ずつで成っている。この間の第二連は、辺りが朧に霞んでいることを告げている。「坊や」は二部構成である。第一、二連は「我」に反抗する幼子が寝入るまでを描いている。第三連は、その幼子への「我」が呼びかけである。

四連から成る詩は、一連四行の詩「明治二十七年十一月弟正雄の柩を送りて」・「稚きものよ」と一連六行の詩「けふより姉」の三篇である。

「明治二十七年十一月弟正雄の柩を送りて」は三部構成である。第一連は、今はの際の弟の様子である。第二、三連は、弟の野辺の送りの様子である。第四連は、弟の感謝の様を思い浮かべたということである。「稚きものよ」は二部構成である。第一連から第三連は、「稚きものよ」で始まる、兄との別れの呼びかけである。第四連は、兄の棺が出て入ったが、幼い弟はすやすやと眠っていたことが記されている。「けふより姉」は、妹の生まれた女の子の言葉が第一連の途中から第

四連の途中までを占め、一篇が一文となつている(第一連が第六連に跨つている)詩である。

五連から成る詩は、「妻とふ鹿」・「年の暮」の二篇で、共に一連四行の詩である。また、共に二連、二連、一連の三部構成となつている。

「妻とふ鹿」の最初の二連は、鹿の声がして、雄鹿が近くに來たらしいことが記される。次ぎの二連では、銃声が轟いて、その鹿が撃たれたらしいことが記される。最後の二連は、やがて獵師の歌声が聞こえて來たことを記して、詩は終わつている。これは、序破急の展開である。「年の暮」は、何もなすことなく今年が暮れたという思いを記す二連で始まる。次ぎの二連は、このようになすこともなく年が暮れて行き、「我」は年老いて行くのだらうという思いが記されている。最後の二連は、そのように年を取つても、我は我だという思いを記して、詩は終わる。こちらは、起承転の展開である。

六連以上の連数から成る詩はそれぞれ一篇ずつとなつている。これは、前節の「わが影」と傾向を一にする。

六連から成る詩は、一連六行の詩「我もむかしは」である。この詩は二連ずつの三部構成である。最初の二連は、子供の頃の大晦日から元旦を思い出して描いている。次ぎの二連は、昔に返ることは出来ず、昔を思い出して慰めたことを記している。最後の二連は、昔を夢見ることもなくなつたが、元旦の今日、昔を夢見て心を慰めたいといつてゐる。現在までを三つの時に分けて述べている。

七連から成る詩は、一連四行の詩「蝸牛」である。この詩は四部構成である。最初は第一連で、蝸牛が垣根を這つていたことが記されている。第二部からは二連ずつになつている。第二、三連は、子供の手に取られ、角を突かれて引つ込むさまが描かれる。第四、五連は、子供が歌いながら角を突いて興ずる様子が描かれる。最後の二連は、雨が激しくなる中で、子供が遊び続ける様子を映して終わる。第三部、第四

部と視界を広げて行つて終了するという方法である。

八連から成る「除夜の兎」も一連四行である。この詩は、元旦の風揚げを楽しむにしている子供を描く前六連と寝入つた子供を描く終りの二連の二部構成である。また、第一連と第四連が同じ母親への頼みの言葉で、第一部は、更に三連ずつの二つの部分に分けられる。二重構造で描かれた世界ということになる。

十五連から成る「帰らぬ父」は、行数の変化する詩である。この詩に見られる行数は、一連四行・五行・六行の三種類で、行数の変化は話の展開と深く関係している。この詩も二重構造で、先ず少女の父親の死を浮き彫りにする冒頭からの十四連と父親を待ち続ける少女を思い遣つた最後の第十五連の二部構成になつている。次ぎに、この詩で一連四行になつているところは、第一連から第三連までの三連、第九連並びに第十一連以下の五連の三カ所である。最初の三連は、歌を歌いながら麻を摘んでいる少女を見つけたところである。第九連は、少女が問はず語りに父のことを語り出すところである。第十一連以下は、父は亡くなったので、もう帰つて來ないと告げる「我」とそれを否定する少女の会話から成る四連と第二部の一連とに分かれる。一連五行になつているところは第六連であるが、ここは、少女の家が分かつて、どのような人の子供だらうと、少女を見直したところである。このように行数の変化を話の展開に結び付けた詩は、先の三人の詩集にはなかった。

十八連から成る「宇之が舟」は、一連四行の詩である。この詩は、六つの場面から成つている。第一部は最初の二連で、精霊舟を流す夜が來たことを告げる開場の部分である。第二部は、第三連から第五連までの三連で、子供が流れて來る舟に石を投げて沈めて遊んでいることが記されている。第三部は第六連から第十連までの五連で、精霊舟を持つて來た媼に、子供達がどうして宇之は遊びに來ないのかと問う

ところである。第四部は第十一連から第十三連までの三連で、媼が宇之の霊を送る舟だから、沈めないようにと頼むところである。第五部は第十四連から第十六連までの三連で、子供達が沈めるな沈めるなと言いながら、舟を追って行ったところである。第六部は、最後の二連で、媼が子供達の行方を見送って立っているところである。第三、四、五部にある会話は、数連に跨っている。

二十八連から成る「尼法師」は、一連六行の詩である。この詩は、「我」が尼法師に寺を巡って行脚する訳を問うまでの五連と、残りの尼法師の答えの二部に分けられる。この詩では、偶数行が四字下げの連と第二、四行が二字下げ、第三、六行が四字下げの連の二種類がある。後者の字下げの連は、第四連、第七連から第十連までの四連、第十二連、第十四連から第十六連までの三連、第二十一、二十二連、第二十四、二十五連、第二十七連の七カ所で、いずれも尼法師の重要な言葉になっている。なお、第二部は、尼法師の言葉が最初の第六連の途中から最後の第二十八連の冒頭に跨っている。最初の第四連は、尼法師が「ゆくへ定めぬ雲水」であることを明かしたところで、第一部の中心になっている。次ぎの四連は、子供の尼法師が寺に参詣する意味を母に教えられたところである。第十二連は麗しく、楽しい国は寺参りをする人の行けるところと教えられたところ、次ぎの三連の最初の第十四連は鬼に責められると聞いて、参詣を欠かさないうようになったことを語ったところである。三連の残りの第十五、十六連は、母の死と母は楽しい国に行ったと思ったことが語られているところである。第二十一、二十二連は、伯父の勧めで結婚し、嬉しい日々を送ったが、寺へは足が遠くなってしまうことが語られている。第二十四、二十五連は、寺参りを怠った罪の恐ろしさから伯父の家に逃げ帰り寺参りを始めたが、翌年伯父が亡くなったところである。最後の第二十七連は、仏の楽しい国で夫を待つのが自分の願いだと尼法師が語る

ところである。「帰らぬ父」と似たような方法が採られている。

「花ふゞき」は、矢野氏の指摘のように「死」と「幼児」を詠じたものが多い。その理由として矢野氏は、玉茗が僧籍にあったこと、この「二、三年の間に相次いで兄弟を失ったこと、また、それにはまだいとけない遺児もあつた事」を挙げてゐる。但し、「幼児」には、「けふより姉」のようにあどけない子供の世界を詠じた詩も多い。僧籍にあつたことに最も深く関わる詩は「尼法師」であろう。矢野氏は「歌ひぶりは、真情の吐露、実感の直叙とも評すべく、端的に人の胸を打つものを有つてゐる。」と、評してゐて、それはその通りであるが、玉茗の形式に注いだ工夫にも注目すべきであろう。先に記したように、その工夫は、視覚的なもので、字下げと句読点によつてなされていた。七五の音とこの視覚的な工夫はきわめて自覚的なものであつたと考えたい。

嵯峨の山人「いつ真で草」

嵯峨の山人の「いつ真で草」の詩は、僅かに九篇である。冒頭にも記したようにこの篇数は、他の詩集に比べて極端に少ない。この少なさは、矢野氏が「詩は彼にとり、最初から余技余業に過ぎず、」といつてゐるような事情によるのであろう。

この詩を連の数からみると、一連から成る詩が七篇、二連から成る詩が一篇と、三連に達しない詩が九割弱を占める。これは、藤村の「草影虫語」に近い。「草影虫語」は一連から成る詩が二篇、二連から成る詩が三篇であつたが、前記のように一連だけの詩が殆どとなつてゐる。詩の調子については、矢野氏に「比較的自由で、七五調を主軸としてはゐるけれども、時に七・七を交へたり三・七、四・八、五・七を挿入せるもの（「白髮翁」）、四・七、六・七、五・四（「荒野

の曙」、五・六、五・五(「おさなご」)を混用せるものなどあつて、恰も後の自由詩の、或は律格研究者の、無自覚的先駆者たるかの概がある」という指摘がある。

一連から成る詩の行数をみると、六行、七行、十行、十三行、十六行、二十行、二十一行がそれぞれ一篇ずつとなっている。全て六行以上なのは、前節「花ふゞき」と傾向を一にしている。詩の調子は、全体としては矢野氏の指摘の通りであるが、「おさなご」は五七調が主軸と見るべきであり、五七調のものとしては他に「山蔭の翁」もある。その外、矢野氏は挙げていないが、五七五で始まる詩が四篇もある。また、偶数行が四字下げとなっている詩が一篇ある。

二連から成る詩は前出の「荒野の曙」一篇で、行数は五行である。調子は、矢野氏の指摘の通りで、自由詩と言つてよい。

残りの一篇は、七連の詩「白髪翁」である。この詩は連の行数の變化する詩で、第五連までが一連四行、残り二連は一連五行となっている。一連四行の部分は矢野氏の指摘のように七五調が主軸となっているが、一連五行の部分になると主軸も見えない自由詩である。四部構成で、起承転結の展開になっている。第一部は第一連で、老いの訪れを記している。第二部は第二、三連で若い時の力も熱もなくなったことを告げている。第三部は、第四連から第六連までの三連で激しい悔恨が記されている。第四部は最後の二連で、決意、命令の言葉となっている。

「いつ真で草」の詩について矢野氏は、「内容的には取立てて言ふべきものが無い」と述べている。しかし、老人の心境や厭世的な思いを詠じた詩が半数ほどを占める詩集は他にない。また、幼子も老人の視線から詠じられている。このような幼子の見方、自由詩的な詠じ方には最初の「独歩吟」に近いところがある。

宮崎湖処子「水のおとづれ」

湖処子の「水のおとづれ」の詩は、二十六篇である。

この詩集を連の数からみると、一連から成る詩が九篇、二連から成る詩が四篇と、三連に達しない詩が丁度半数である。この割合は、「わが影」、「花ふゞき」に近い。詩の調子は、五七調の「君と吾」、五、七五、七五、七五七、七七の繰り返しから成る「春のゆうべ」を除いて、他は全て七五調である。七五調とそうでないものとの比も「わが影」に類する。また、「花ふゞき」のように全ての詩に句読点が施されている。句読点共に特殊な場合を除き、行末に必ず置かれている。句点は、「花ふゞき」と異なり、文末であれば、連中でも行末に置かれる。読点は、数詞を畳み掛けたところだけは行中でも使われている。

一連から成る詩の行数をみると、四行が七篇、六行が二篇となっている。「抒情詩」の連の行数として、四行、六行は最も普通の行数である。「菖蒲」という四行の詩一篇は、偶数行が二字下げとなっている。

二連から成る詩の行数をみると、四行が二篇で、残り二篇は六行四行、九行十六行と行数の變化する詩である。最後の九行十六行と行数の變化する詩が前記の五七調の詩「君と吾」である。なお、この詩の後連第十六行は七音だけとなっている。

三連から成る詩は、一連四行の詩「忘れ水」・「水声」と行数の變化する詩「釣翁」・「小川」の四篇である。

一連四行の詩「忘れ水」・「水声」は共に偶数行に句点が置かれている。「忘れ水」は、偶数行が二字下げとなっている。この詩は、忘れ水の流れて来た方から流れてゆく方へと一連ずつ追って行っている。「水声」は、波線で連間が仕切られている。波線が詩末に付けられて

いるものには他にもあるが、連間を仕切ったものは他にない。また、第三連は、偶数行が二字下げとなっている。内容は二部構成で、第一、二連は小川や橋の下の水の音を差し示して行くが、第三連は昔の音に聞き入るといふ世界に転じている。行数の変化する詩の中、「釣翁」は、六行、八行、八行と行数が変化している。この詩は、六行部と八行部の二部構成になっている。第一連はいつも釣りをしてる翁を紹介し、第二、三連は年月が経っても釣りをしていることを、周りの自然や人の変化を挙げて描いている。不思議な時間の流れる詩である。「小川」は、十二行、十二行、十行と、「釣翁」と対照的に最終行で少ない行に変化する。また、各連の後二行が二字下げで、繰り返し多い表現になっている。この詩も二部構成で、前二連の十行では旅路で日が暮れてしまったことが記され、二字下げの二行で小川の流れが示される。第三連は、この小川に対して語りかける言葉である。

四連から成る詩は、行数の変化する詩「春のゆうべ」・「疎屋」の二篇である。四連から成る詩が全て行数の変化する詩というのは他にない。「春のゆうべ」は、二部構成である。行数は、第一、三連が四行、第二、四連が二行である。また、各連の最初の行は三字下げとなっている。全体は、「○○○○の ゆうべの○○を○○○○ば、○○○○○○こそ○○○○へ。むかふところはことなれど、○○○○○○に いそぐ心はおなじかるらん。」の繰り返しである。珍しい形式である。「疎屋」は、第二連が八行で、他は六行である。この詩は、三部構成で、第一連は野中の一本松の陰の疎屋を、第二、三連はそこに住む翁とその生活を記す。最後の連は、この翁に対する感想を記して終わっている。

五連以上から成る詩は一連四行、偶数行が二字下げで、それぞれ一篇ずつとなっている。

五連から成る詩は、詩集冒頭に置かれている失題の詩である。この詩は三部構成で、挨拶の詩である。第一連は、「まれに來ませし君」に何も饗応するものがなくなるとことわっている。第二連から第四連までの三連は、家の裏の畑に豆が「いとうつくしくみの」っていると説明する。第五連は、この豆を「君」に捧げるので、受けて欲しいと言つて終わっている。

九連から成る詩として、失題の詩の次ぎに配されている「讚美歌」がある。この詩は、第一連と第九連が「足るてふこと」のもたらす安らぎを説く同一の文の繰り返しとなっている。第二連には、更に「うきたる願」を捨てることが説かれ、これらがこの詩の主題と見られる。第三連から第八連までの六連は、二連ずつが一組となって、具体的に「我」の幸福な生活を述べて行く。第三、四連は、馬も車もなく、食するものも自分で作ったものだけれど、不足を感じることはないと言べる。第五、六連は、妻が一人で家事を努めているけれど、不平を言うことはないと言ふ。第七、八連は、この「我」・妻・子三人笑つて無事に過ごす以上の幸福はないと述べている。この詩は、作者の幸福論を詠じた詩と見られる。

十三連から成る詩として、「摘艸」がある。この詩は、少女達の若菜摘みを詠じた田園詩で、五部構成になっている。第一部から第三部までは三連ずつで、第一部は少女達が若菜摘みに来る野原の様子、第二部は野原に着いた少女達が声を交わしながら、若菜摘みを始めた場面、第三部はやがて一人一人に分かれて行ったことが描かれて行く。残りの二部は二連ずつで、第四部はやがて野原には誰もいなくなったことが描かれ、第五連では野末で少女達がまた集つて、一緒に帰って行くことが描かれて終わる。

十五連から成る詩として「牽牛花」がある。この詩は、二部構成で、第十三連までの牽牛花の家を描いた部分と最後の二連のその家がなく

なつた後からなつている。第十三連までは、更に、荒れ果てた家とその住人の翁とを描いた第七連までと、牽牛花がその垣根に咲いていたときを描いた残り六連とに分けられる。国木田独歩流に言えば、忘れ得ぬ人とその家を描いた二重構造の詩ということになる。

十六連から成る詩として「雲雀」がある。この詩は、雲雀と少女の物語詩で、四連ずつの四部構成になつている。第一部は茅花を摘みに来た少女を紹介したところである。第二部は、その少女が親を無くした雲雀の雛に茅花を含ませたところである。第三部は、それから少女が毎日尋ねて来て雛の世話をしている内に、雛が巣から出て歩き回るようになったところまでである。第四部は、少女が来なくなつたところである。雲雀の雛が神の化身のような少女に救われた物語になつている。

十八連から成る詩として「雪中」がある。この詩は、乳母の許に行こうと家出した薄幸の少女いととの物語詩で、いとの家出を描く前半の十六連といとの死を暗示した最後の二連に大きく分けられる。前半の十六連は、いとの家出を中心にした冒頭からの十三連と、いなくなつたいとを探す父達を描く第十四連から第十六連までの三連とに分けられる。ところが、この前半の十四連が更に三つの部分から成つている。この、いとの家出を描く十四連は、家出したいとを描く冒頭の三連と第十連からの四連の間にいとの生い立ち、いとにとつての乳母を説明した六連が挟まれている。冒頭の三連は物語の序のようなもので、第十連からの四連はいとが家出するところからその姿が消えてゆくところまでを具体的に描写していつている。このような重層的な構成は、湖処子の物語長詩の特徴である。

二十二連から成る詩として「おそよ」がある。この詩も薄幸の少女おそよを描いた物語詩である。この詩は、最後の第二十二連が第二十一連と実線で仕切られていて、経売りとなつたその父の物語という枠

を形作つてゐる。おそよの物語は、更におそよの死を描く第二十一連とその前の二十連とに分けられる。前半の二十連は、「我」がおそよを尋ねた時の様子を語る冒頭からの九連と、「我」とおそよの会話を中心とする第十連からの十一連から成つてゐる。この物語詩の中心は、第十連からの十一連にあると考えられるが、ここはおそよを励ます「我」と健気に父を案じるおそよの言葉に父を指弾した「我」の言葉が二回繰り返されるという構成(一回目は四連、二回目は七連)になつてゐる。父を指弾した「我」の言葉は同文で、第十三連と第二十連に置かれてゐる。キリスト教徒である湖処子の思想が反映した作品である。

「水のおとづれ」は、挨拶の詩で始まり、湖処子の思想を述べ、牧歌的な長詩に進み、短い詩が続いた後、今度は悲しい物語長詩になり、最後はまた短い別れを中心にした詩で終わるという風に、「抒情詩」の詩集の中で最も整つた体裁をもつてゐる。一連の行数の変化する詩は六つの詩集の中で最も多く、句読点を自然に施してゐるのもこの詩集の特徴となつてゐる。

内容上は、キリスト教徒的な考えの反映した詩篇や薄幸の少女を詠じた物語詩が特徴的である。早く日夏耿之介が「哀婉の情」を湖処子の詩の特徴としていたが、これらのことであろう。

纏めと考察

『抒情詩』の各詩集の形式などの特徴を次ぎに纏めてみたい。

連の数が少ない詩が多いのは「いつ真で草」と「独歩吟」、逆に多い詩が特徴といえるのは「水のおとづれ」と「花ふゞき」・「わが影」である。「いつ真で草」と「独歩吟」では連数は「いつ真で草」の方が少ないが、一連の行数を見ると「独歩吟」の方が行数が少ないので、

「独歩吟」は短い詩が多いという印象が強い。

一連の行数の変化する詩は、「野辺のゆき」、「花ふゞき」、「いつ真で草」、「水のおとづれ」にあるが、五、六篇を数える「野辺のゆき」、「水のおとづれ」と一、二篇の「いつ真で草」、「花ふゞき」とに別れる。最も多い「水のおとづれ」では、行数の変化は構成と相当に關係している。一方、一篇だけの「いつ真で草」は、行数の変化が調子と關係していた。

調子は、七五調の定型詩が殆どであるが、「独歩吟」、「いつ真で草」の二詩集は自由詩化の傾向が強い。

字下げは、主に二字下げと四字下げの二種類である。二字下げは、「独歩吟」、「水のおとづれ」に見られ、その時は主に偶数行が字下げされている。四字下げは「花ふゞき」で用いられているが、この詩集では三行を単位として二字下げ・四字下げが合わせ行われている詩も相当ある。また、「花ふゞき」では、全ての詩で字下げが行われている。

句読点は、句点、読点共に用いられているものと、読点だけの二種類がある。前者は「花ふゞき」、「水のおとづれ」の二篇、後者は「野辺のゆき」、「一篇である。「花ふゞき」では、二行目読点、四行目句点といった風に様式性が強い。

構成は、二部、三部、四部の構成が広く取られている。連数の多い詩では、「水のおとづれ」が重層構造、「花ふゞき」は重層構造に行数の変化や字下げの変化を絡ませた方法、「わが影」は散文的に日時で場面を分けて、それを追って行く方法と、それぞれに方法の違いが認められる。

右の『抒情詩』の形式・構造の中で、「独歩吟」、「いつ真で草」の試みた自由詩、「花ふゞき」、「水のおとづれ」、「野辺のゆき」で施された句読点を藤村の『若菜集』に見ることはできない。このことは、

藤村の詩作の基本が非散文ということに置かれていたことを示しているよう。『若菜集』は、散文とは異なる世界を作り上げた作品だった訳だ。

『若菜集』に影響を与えた『抒情詩』の作品は、湖処子の「水のおとづれ」だったのではないかと思われる。「水のおとづれ」の編集の有り様は藤村の参考になったと思われる。挨拶や思想を冒頭に置き、詩集中に山を設けるという点は「水のおとづれ」に習ったものに違いない。

しかし、『若菜集』の前半を括る、冒頭の六人の乙女の詩と姉妹の問答の詩のような女性が主体になった詩は、花袋が序で女性に言及しているが、『抒情詩』の詩には全く見られないものであった。また、六人の乙女に続く春の到来の詩も『抒情詩』にはない世界である。¹⁵このように見れば、比較的類似するところのある男性の恋を後半に置いた意図も分かってこよう。『若菜集』が『抒情詩』を意識した作品であったことは間違いない。

注(1) 『若菜集』所収の詩の初出が三十年三月誌までとなっていることから、その計画を知っていると考えている。

(2) 筆者は、拙稿「島崎藤村の詩の工夫—構成を中心に—」(『人文』平成一六年八月)を始めとする論考で、藤村詩について形式と構成を連を単位として考察したので、本稿も同じ方法で考察することとした。

(3) 読点は一行を示す。従って、七六、七五、七六は、一連三行で、この調子が詩の中で繰り返されていることを示している。

(4) 剣持武彦「『抒情詩』に於ける花袋と独歩」(『日本近代詩考 比較文学への試み』昭和五〇年九月)によれば、この詩は佐々城信子との破婚を背景に持つ作品とのことである。

- (5) (4) で剣持氏も、初出が同じで、詩想の類似を認めている。
- (6) (4) の論考。
- (7) 「新しき声」(明治四〇年一〇月)。
- (8) 「創始期の新体詩―『新体詩抄』より『抒情詩』まで―」(明治文学全集60『明治詩人集(二)』昭和四七年一二月)。
- (9) (4) の論考。
- (10) 『若菜集』には収載されなかったが、「草影虫語」には「新泉」という複雑な字下げ(「花ふゞき」とは異なるが)の試みもあった。
- (11) (12) (13) (8) の論考。
- (14) 『明治大正詩史』巻上(昭和四年一月)。
- (15) 『若菜集』の編集については、拙稿「初版『若菜集』の構成とその世界」(『近代文学論集』平成一六年一二月)に私見を記した。

(二〇〇六年十月二日 受理)